

第3回「まちづくり懇談会」概要

開催日時：平成21年7月16日 20:00～

開催場所：若宮八幡宮 神楽殿

【企画財政課長（司会）】

みなさんこんばんは。只今からまちづくり懇談会ということで始めさせていただきます。今日の進行役をと務めます企画財政課の水川と申します。よろしくお願いいたします。この懇談会は市長さんが市民の方々といろいろな場所でいろいろな方とお話をしながら、話の中から今後の市政に活かしていきたいという趣旨で始めたものです。今回で3回目になりますが、1回目は子育て支援のお母さん方、2回目は保阪嘉内さんのアザリア記念会、で今回はこういう会で行わせていただきました。その時々のお話の方たちとお話をさせていただいております。

それでは今日出席します市側の担当者を紹介させてください。はじめに横内市長でございます。それから次に、隣が文化財生涯学習担当でやっています雨宮教育課長でございます。私が企画財政課の水川で、隣が地元出席の佐藤、それからあちらで写真を撮っているのが広報担当の保阪でございます。よろしくお願いいたします。それでは会を始めるにあたりまして、横内市長の方からご挨拶をさせていただきます。

【市長】

こんばんは。今日は本当に練習も兼ねてでしょうけど、わざわざお集まりいただきまして真にありがとうございます。今、課長の方からも話がありましたように、今、私は市民と協働でまちづくりを進めているわけでありまして。新聞等で皆さん方もご存知のように、穂坂のまちづくり協議会でワイン作りを行っていて、醸造用のぶどう農家がヴァン穂坂という赤のスパークリングワインですね。普通は白カロゼで赤というのは珍しいんですが、とにかく作ってみたらどうだということで提言しましたら、その気になっていただいてベリーAの1トン、だいたい1トンで720mlのボトルがだいたい1000本できるんですが、あれが500mlですので、1400本くらい作って、1年目ですから市の贈答品としてある程度買ったりして相当もうなくなってしまったんですが、来年はもっと多く作るということです。これからの穂坂のまちづくり協議会は、加工品のジャム等を作る活動を計画しています。そうしたことのほかに小林一三をなんとかして中心街の活性化に結びつけたいと思っております。小林一三の場合は布屋というのが本家ですが、本人が生まれたのは下の山内歯科というところなんですね。布屋の何番目かに生まれたお母さんがあちらに分家して、布屋から竜王の丹沢家よし甚八さんという旦那を婿にもらって、山内歯科のところに新居を構えたんですね。で、そこで生まれたわけで、実際布屋に生まれたわけではないんですね。甚八さんは奥さんが亡くなってしまって、甲州市長の田辺家に婿に

いったわけです。そういったことも、例えば一三さんは関西のほうで活躍されていたんですが、蕪崎のほうにある布屋関係のことは関西の人たちはまったく分からないんですよ。で、それを今調査しているんですが、中宿の清水屋旅館の隣がもう1戸の分家ですよ。あそこで幼少の頃育って、その座敷がまだ残っているんですよ。そういった古い屋敷が残っているので、そういったものを使いながらまちづくりをしていったらどうかというようなことを考えているんですが、また若宮の伝統芸能を継承されている皆さん方のお話をいろいろ聞いて、皆さん方の意見を取り入れながら皆さん方と一緒にこのまちづくりというものをしていくために今日のような催しを、皆さんの意見を聞きながら参考になればなと思ひまして、催させていただきますので、忌憚のないいろいろな話をお聞かせいただければというふうに思っているところであります。

【企画財政課長】

ありがとうございました。ただ今市長の方から申し上げたようにこの懇談会は、いろんなご意見を聞きながらまちづくりを行っていかうということでございます。本日は若宮の神楽団ということですので、伝統文化の継承とまちづくりをテーマで話し合いをしていただきたいと思いますが、概ね一時間程度を予定させていただきたいと思ひます。それでは始めに、若宮八幡宮神楽団の活動状況等を森本団長から紹介をしていただきながら、その後フリートークという形で進めさせていただきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

【参加者（団長）】

私が団長を仰せつかっております、森本です。私が11代目なのですね、それ以前に生山さんとか金子さんとかいう方がおられたんですが、発足当時は36、7名いたところが今現状では17、8名になってしまったんですよ。ですから、後継者不足というところがまず第一にあるんですよ。で、この八幡神社は蕪崎の町全体のお祭りだということですので、我々も力を入れて神楽を奉納しようということで練習をしているんですが、なにせ人が少なくなってしまうのが今一番のネックです。ですから、伝統芸能、伝統芸能と言われますが1人が3つ4つの笛なり舞いなりをしていかなければやっていけなくなってしまうんですよ。そういう点も考慮して我々もそれなりに努力して後継者を育てようとしてはいるんですが、なかなか入ってくれなくて困っているところなんですよ。

【市長】

たしかに伝統文化を継承するというのは、難しいとは思ひますがこういうのは今残っている皆さん方のような熱意のある人達がやれば必ず何かついてくるような気がするんですよ。なんでも、そのことに熱心にやってくれている人がいるとある程度付いてきてくれる人が徐々に出てくるのではないかと考えているんですが、今穂坂でもお神楽が

ありますが、この間、穂坂へ移り住んだ人で2人くらいその神楽団の中に入ったという話を最近聞きました。何も地元の人でなくても、移り住んできた人達がそういう伝統文化に興味のある人達でも、集まってきてくれるのではないかなと、続けていけば出てくるんじゃないかなという気は持っています。だから続けていただくということが本当は一番重要だと思うのですが。

【参加者（団長）】

今若宮の神楽なんていうのは、若い中学生とか高校生とかに来てもらっているんですよ。で、今一生懸命練習していて当日にも出てもらったりとか、でこの間ですが、明野に住む息子が入りたいと言って、別に若宮神社だから若宮の人というのはいないんです。どこでもいいんですよ。ただたまたまここにいる人達は若宮の人が多くて、この子も高校生でやはりこういう子供たちに継承していかなければ、我々だけではどうにもならないんですよ。

【市長】

いずれにしても皆様方の熱意を続けて頂いて、続けて頂くことが重要だと思います。

【参加者（団長）】

我々も使命感というか、役割があります。このまま、梨の礫にするわけにはいきませんので長くやっていかなければならないということで、たとえ一人でも中学生でも高校生でも習ってくれる方には出てもらって一緒にやっていただくという形をとってもらっているんですけどね。

【市長】

それはいいことだと思いますよ。今、私が一番まちおこしで力を入れているのは、もちろんルネスの問題とかそういうのもありますが、ここの葦崎にある文化というのを大事にしなければと。本町通りは新しい家ができて、古い家が見られなくなってしまっていて周りを見てみると例えば、琵琶湖の上にある長浜というのも郊外にバイパスが出て取り残されたという感じではあるが、昔の黒堀だとか昔の家があったからまた観光で盛り返していますよね。ですからそこにある文化というかそういうものを今から大事にしていかなければならないと思うのです。これは時間がかかることですが、去年の5月の国会でまちづくり法案というのが通って、それは歴史まちづくり法案といますが、正式には歴史的風致…とかいうそうですが、それによると文化庁がその地域の歴史的文化財とか遺跡を調査してそれを利活用しながらまちづくりをしていく、そのためには国交省も農林省も補助金を出しますよということなんですよ。それを今、文化庁の100%補助をいただいて教育委員会が地元の大学生と協力して、歴史的文化財とか遺跡を調査している最中ですが、それをやって国からの補助金を取り入れて、神山町全体を屋根のない博物館というものにして歴

史的博物館のようにしていきたいなと思っているんです。この3年間の調査がこれでいいよとなれば国交省のほうから道を作るための補助金、また、田園風景を残すために農道とかそういうものを整備するには農林省から補助金が出たりということになってきます。これは時間のかかることですが、一応手をかけてやっていこうということで、やはり葦崎にはそういう観光資源というか葦崎の特色あるもの、資源というかポテンシャルというものがいっぱいある。そういうものを掘り起こして、葦崎のまちづくりをやっていきたいという方向性でやっているんですよ。他の人たちも意見を言って下さい。

【参加者）】

千野といいます、今、後継者不足という話があったんですが、この若宮八幡も最初は穴山の神楽の指導を受けてやっていたんですね。で、そういいながら今度は親元である穴山も高齢化して後継者不足で逆にこちらから応援で行っているという。こういうものはそのうち単一性がなくなって、ある程度相互乗り入れみたいな形になっていくような気がするんですよ、そうならないかなければ大変なのかなと。先程、今は若宮は地元でやっていて、それを今度葦崎町等で広げようとして、団員は誰でもいいと言いながらもなかなかこれだけ若宮という名前が浸透していると、よその人たちもなかなか入りづらいと思うんですよ。よっぽど受け入れる側も、見守ってやるという形でないと、地元優位という感じで。そういうことを考えると、実際我々もお神楽をやっていて、葦崎の中でいくつ実際お神楽があってその団員がどのくらいいて、昔は本当はここにもあってというような系統的なことが分かっていないんですよ。ただ穴山と若宮八幡は分かっていますが。だから本当はそういうような形で一つ整理した中でここは継続していこうだの、そういうのは一度に返してお祭りの日と合わせた形でやっていけば、葦崎の中での神楽という位置づけでクローズアップされていくのではないかなと。それが一つの文化振興にもつながるのではないかなと。高千穂みたいにまさに神楽でまちおこしをやっていきますよね。そこまでは葦崎の場合は無理だけれども、一つ神楽だったら神楽をベースでも、実際葦崎に神楽がマッチングするかはまた別ですが。ただこういうものを残すということであれば、そういうことを行政が整理した中で掘り起こしを図っていただければありがたいなと思います。

【市長】

教育委員会の閨間とか山下はお祭りといったら必ず行きますからね、倭文神社とか。そこで写真を撮ったりしていますよ。お神楽の団体は穂坂にもあるんですよ。

【参加者（団長）】

柳平と宮久保、上今井もあります。ある程度教育委員会の方で、どこにどのような形であるかということを出していただければそのような話が出てくると思うんですよ。私は今穂坂には3つくらいあるのではないかなという感覚でいますが、その辺が広く分かれば

もっとうまく話になっていくのではないかなと思うんですかね。

【市長】

穴山の穂見神社ってどこあるのですか。

【参加者（団長）】

石水の下です。

【市長】

あの一番上にあるね。あれが穂見神社というのですか。旭にもありますね。

【参加者】

あそこでも神楽殿はあるんですよ。

【参加者（団長）】

穂見神社のすぐ下の中条の入り口にもありますよね。

【参加者】

村々にみんなあります。

【参加者（団長）】

ただ神楽をやっているところが少なくなったということですよ、現状で。まあ穂坂には3つ4つあるんですが。

【市長】

お山の神さまは立派なものですよ、山神社。だけどそういったあれは市の広報とかホームページに葦崎のお神楽をやっていることを紹介したり、楽団員を募集してますというように載せてもいいね。

【参加者（団長）】

いいですね。広報に載せていただければありがたいですよ。

【教育課長】

葦崎市の文化財審議委員があるんですが、去年その中で今、民俗無形の文化財ということで、甘利小学校の綾棒踊りと藤井の四ツ打ちの2つが市の指定の文化財になっているんですよ。それで葦崎市全体で神楽殿の調査をしようということで、円野の内藤先生が中

心になって地域でどれだけそういうものがあるのかという調査をしようという話が出たんですけれどもね。そんな話が出ましたので、一応やるということにはなっています。

【市長】

皆様方ほかに。沢登さんどうですか。沢登さんは長いでしょうね。

【参加者】

私は最初からやっていますよ。歳をとってね。

【参加者（団長）】

最初からやっているのは、沢登さんと深澤さんと私と三井さんと野田と阿部さんですね。

【参加者（団長）】

53年から、32、3年やっているんですよ。

【参加者】

武男ちゃん、広報へ団員募集を載せるにしても男女は構わないのですか。

【参加者】

神楽が今のところどこも男性ばかりですからね。今、女性はある程度聞いたことないですね。

【参加者】

女の方はこんなに小さい子がお姫様として衣装を着て出ていますよね。山梨市の岡神社なんか神楽で女の子が2人も出ている。うずめが最後先導して帰るのに地を這うように舞って、つれて帰るのにゆっくり10分以上もかかるんですよ。そして、お姫様も幼稚園くらいの女の子でやっています。

【参加者（団長）】

それは太太神楽というわけだ。

【参加者】

何の神楽だか知らないけど。

【参加者（団長）】

太太神楽と大和神楽があるというのは、聞いてますが。

【参加者】

じゃあ太太神楽なら女の子は出していいということですか。

【参加者（団長）】

いいかどうかは分からない。ここに宮司さんいるから宮司さんに聞いてもらったほうがいいや。私にはわかりません。

【参加者（団長）】

女の子がやっているというのは聞いたことがないですね。

【参加者】

行ったじゃないですか。それでおひねりがどんどんその子にとんだでしょ。

【参加者】

大衆芸能と変わらないな。

【参加者（団長）】

そうそう。大衆芸能ですよ。みんなよそのお祭りとか見に行っているんですよ。みんなが集まっていくわけじゃあないけど、個人的に2、3人で見に行ったり、それを自分のものになるかならないかを研究しているんですけどね。

【市長】

指導者というのは先輩たちから伝承していくしかないということですね。新たによその方から教えに来てくれるというわけでは今のところはないんですよ。

【参加者（団長）】

それは大和神楽というのと太太神楽という二つの流れがあるんですよ。そうすると舞い方が全然違うんですよ。太太神楽というのは優雅というかゆるやかで、大和神楽というのは荒いんですよ。だから対象にならないんですよ、我々は大和神楽を見に行かないと。で、もともと宮久保の人達がやっていたのは太太神楽だったらしいんですよ。我々は穂見神社に大和神楽を教わったんですよ。それでなんとかお願いして変えてもらったんですよ、現実には。

【参加者】

事例としては、穂見神社の人たちが時々来て教えてくれたり、竜王の赤坂に新しく神楽団を作りたいということで、うちの団員の何人かが教えに行って向こうでも発足したとい

う経緯はあります。

【参加者（団長）】

だから向こうも同じ大和神楽なんですね、系列が。大和神楽をやっているところは少ないんですよ、ある意味。

【市長】

上今井はどっちですか。

【参加者（団長）】

上今井も太々神楽ではないですか。だから舞い方が違うんですよ。北巨摩へ行くと太々神楽のほうが多いんですよ。

【市長】

そういう詳しいことなんて知らなかった。

【参加者（団長）】

だから見に行きますけど、もう動き方が全然違います。まあ今年は穂見神社まで行きますから、向こうが足りなくなってしまうって、こちらからみんないきますけどね。昔は北巨摩で神社庁で集まって神楽の研修会というのをやっていたんです。須玉にも明野にも行きました。

【市長】

県内の神社庁でやっていたのですか。

【参加者（団長）】

いや、北巨摩だけでしました。峡北支部で、3～4回やったね。蕪崎の市民会館で。やったけど、やっぱり太々神楽と大和神楽では質が違うんですよ。質が違うから必然的に自分達とは違うという感覚で見ているんですよ。他はどうか分かりませんがね。蕪崎にいくつあるかわかりませんが。ただそういう集まりがあって話をするのもいいことだとは思いますがね。なんとかそういう形で市の方で音頭をとっていただければ、また我々も参加をさせてもらってお互いにいろいろな話をしたほうがいいのではないですかね。

【参加者】

舞うのは女の人はダメだって言ってたけど、楽じゃあいいのですか。

【参加者】

まあ今の時代だからいいと思いますよ。

【参加者】

だってこのまま後継者がいなくなって女の人がやりたいという人が多く来たら、だめだって断るようになったらばかばかしいですよ。

【市長】

お面などは買っているんですか？

【参加者（団長）】

それはお宮さんのほうで我々が借りるんですよ。お宮さんが持っているんです。お面とか烏帽子とか衣装とか。それらは全部うちの方で借りています。自分のところで持っているなんていうところはほとんどないでしょう。

【参加者】

いや、あります。

【参加者】

藤原さんのところに田舎の神社ではお面を借りにくるんですよ。

【市長】

持っているところもあるの。

【参加者】

いや少ないですね。

【市長】

お山の神社なんかはあるの。

【参加者】

うちで宮司をしているところは、比志神社は自分のところのものを使っていると思う。あとはだいたいうちのを使っていますが。

【市長】

衣装の種類や数はどのくらいあるの。

【参加者】

神楽団によって舞う種類というか演目が違うので、一座二座と言うのですがね。うちの場合は27座あります。

【参加者（団長）】

ここでは17演目ありますが、要するに夜だけしかできないんですよ。みんな仕事していますから。宮久保の人が来たときには昼間からやっていたらしいのですが、ただそこまではね。若い頃は昼間は神輿をかついでいたんですよ。そして夜になってお神楽をやっていたわけですから夜だけしかできなかったんですよ。だから演目は少なくなったんですよ。それでも人が足りないですよ。だから先程も言ったように一人で3つ4つとかね。

【市長】

そういうものですか。じゃあ全部覚えているわけではないんですね。

【参加者（団長）】

たいがいは見てて分かりますけどね。やれといわれればやることもできますが、ただそれなりのことしかできないという。やはり一生懸命練習している人には敵わない。

【市長】

他になんかありましたら。

【参加者】

斬新な意見でいいですか。今、話に出たように韮崎市の中で神楽団というのがいくつあるか調べてもらって、韮崎の文化ホールを土日に貸し切ってもらって、そういう神楽団で協力してくれる人たちを集めて、若宮ではこれを穂坂ではこれを舞ってというような交流をお互いにしていったら。

【参加者（団長）】

だからそれは前言った峡北地区の神社庁で講習会があったんですよ。いくつも集めて。

【市長】

北杜にはお神楽はまだやっているところがあるのですか。

【参加者】

たくさんありますよ。

【市長】

それならできないことはないですよ。神社庁を使うかどうかはわからないけど。

【参加者（団長）】

みんな順繰り回ってやったんですよ。うちでは今回はこれをやるとか決めてやっています。最低でも3回はやりました。

【市長】

それも一つの案ですよ。

【参加者（団長）】

ですから彼が言うのは、今の猪又君ですけどね、蕪崎市内でも教育委員会でご苦労願ってなんとかしていただければありがたいなという話です。

【市長】

今いくつあるのかな。

【参加者（団長）】

結構あるんじゃないですか？

【市長】

旭にはないんだよね。

【参加者】

今、その穂見神社、苗敷山はあります。

【参加者】

上で舞うの。

【参加者】

下です。

【市長】

下社というか、里宮。

【企画財政課長】

南宮神社もあるんですか？

【参加者】

南宮神社は上今井です。駒井の当麻戸神社も上今井。

【市長】

ああいう小さい子たちにお神楽というものがあるということを見せるだけでも。

【参加者】

猪又さんの家は親子三代なんですよ。

【参加者】

昨日、NHKで親子三代登場したんですよ。おじいさんと息子と孫が出て。三代続くというのはいらないんですよ。

【参加者（団長）】

ですからみんな何らかの形で携わるようになってくれるにはね。でまた、毎日来ているんですよ。だから熱心ですよ。ありがたいなと思って。少しでも。

【市長】

こういう親の会に参加してくるというだけでもいいですよ。

【参加者】

この女の子は弓とか矢などの小物を作るとか手伝ってくれているんですよ。そしてこの上のお姉さんが当日の司会進行を務めてくれる。

【市長】

いよいよ30日で練習しているということだね。

【参加者（団長）】

そうです。

【市長】

そしてどこか神社に手伝いに行くところはあるの、穂見神社とか。

【参加者（団長）】

穂見神社は行ってやらなければ向こうが間に合わないの、何人かが行って教わったかわりに向こうへ行ってということですね。赤坂の神社の方は人がいるようですけどね。そっちは言われていないので行きませんが、30日の日は研修で見には来ます。で、一番我々が悩んだのは、何にも形がない無形なんですよね。それを忠実に受け継がなければならぬということがすごく厳しかったですね。

【市長】

今はやっぱり先輩たちが若い人に教えるということですか。

【参加者（団長）】

そうですね。何らかの形で忠実に教えるようにしていますけどね。

【市長】

猪又さんなんか相当やっているんでしょう？

【参加者】

笛ばかりです。

【企画財政課長】

楽譜はあるのですか。

【参加者（団長）】

一応楽譜といえるのか分かりませんが作ったんですよ。だから耳で聞いて覚えるんですよ。

【市長】

ピーターロロピー。

【参加者】

ですから歌という感じですね。

【参加者（団長）】

独自にここで作ったんですよ。穴山の人たちはそれがなかったんです。だからみんな最初に教わる人達は耳で聞いて、歌を聞いた中でリズムと音程を覚えて、それから笛で。だけどどこを押さえるかというのがわからなかったの、そこへ書いたんですよ。今度は

書いたからみんなにそれを見せれば案外早く穴をふさぐことができる。

【参加者】

太鼓はどうなっているの。

【参加者（団長）】

太鼓はもう耳で聞いて覚える。だから形がないからえらいですよ。教わったとおりの忠実に再現しなければならいんですよ。当初30年前は70日間やっていたんですよ、一日も休まず。

【市長】

70日も。

【参加者（団長）】

忠実に教わってその動きをするために。よくみんな通ったと思うんですよ。

【市長】

よく53年に興したね、生山さんだっけ。

【参加者（団長）】

若い人たちが地元でやるんだと言い出して私たちも嫌とは言えず。

【参加者】

だから初めの年はお客さんがすごかったですよ。ものすごい人だった。

【参加者（団長）】

だけど初代の団長は生山さんだったんですよ。生山さんが穴山の出だから穂見神社の人たちを呼んできてくれたんです。で、2代目が金子さんになったんですよ。私で11代目ですけど6人亡くなっているんですよ。

【市長】

千野君はいつからやっているの。

【参加者】

始めたのは3年か4年経ってからかな。だからもう30年くらいやってます。

【市長】

そんなに経つんだ。

【参加者】

市長さん私はもう20年もやっているんですけど、下から2番目なんですよ。

【市長】

20年もやっているの、そうかい。

【参加者（団長）】

そこに小泉君が来ているんですけど、今年から入って明野から来たんですがね。少しでも入ってもらえればありがたいことで。

【参加者】

だからこういう呼びかけを何回も広報で載せてもらえれば。

【市長】

広報は見る人は見るけど、現在ではホームページです。今度7月30日にここで舞ったら写真でも撮って、ホームページへ載せて今募集していますという。

【参加者】

そういう何らかの方法でいろいろな面でもってもらえれば、興味を持ってくれる人が一人でも二人でも増えてくれれば。

【企画財政課長】

ホームページというのは結構見えていますよね。

【市長】

明野からというのはどうやって知ったのか不思議ですが。

【参加者（団長）】

うちの神楽というのは結構恵まれているんですよ。伊勢神宮へ行って舞をしたりね。山梨県内でもほとんどないのではないかと思います。

【参加者】

西島神楽とこと二箇所だけです。山梨県で伊勢神宮で舞ったのはね。だからそうい

うこともできたという、要するに一生懸命やったんですよね。

【市長】

そういうのはたまにはあるの。伊勢神宮に行って奉納するというようなものは。

【参加者】

うちの場合はこちらからお願いをして。西島神楽の場合は県の文化財になっていますので、それで記念のときに神宮に行ったんですよね。うちの場合はお願いをして10周年でどこかに行って舞いたいということで、どうせ行くなら伊勢神宮がいいとって申し込んで、話をしてから6年くらいかかったんですよね。で、たまたま大学の時の同級生が伊勢神宮にいてその人が神楽殿の担当の課長になったんですよ。これはうちの父親が神社庁長をしていて、この2点で許可になって。だから本当に運がよかったです。

【市長】

今言う峡北なら峡北のを集めて文化ホールでやるとか、その他に神楽の魅力を訴える何か方法というのはないのかな。

【参加者】

山梨岡神社は20年に1回で、テレビなどで知られているからリクエストが多いんですよ。

【参加者】

だからそういう何かあれば。

【参加者】

平日の昼間だとうちの場合はなかなか実現が難しい。だけど他の大会の場合はほとんど平日だからね。県民文化ホールで毎年やっているんですが、他のところからいろんな神楽団が来て毎年やっています。

【市長】

だけど地元の神楽団がいくつあってその人を投入したりという、市の神楽団の発表という感じでどうでしょうかね。

【参加者（団長）】

やっていただければ我々もそれなりに見に行ったり、携わったりしたいと思うんですが。

【市長】

もう55周年は間に合わないですが。いずれにしてもこうやって継承して続けていったらいいということはある話で、やはりそこでやってくれる人たちの熱意しかないですね、熱意しか。森本団長だって先輩たちがやっているから後に続いて続けなければいけなかったんでしょうね。どうしてもやっていかなければならないというのがあったらいいですね。それでも継承していくというのはいいですね。

【参加者（団長）】

つぶされると困りますからね。それが第一ですよ。舞手がなくなった、笛を吹く人がいないなんていうのはわれわれも困りますし。だから一人でも二人でも入ってきてくれば、一人でもこの祭りを盛り上げていかなければならないですね。

【企画財政課長】

そろそろ時間ですけども、今日は伝統文化の継承ということでお話をしてきましたが、せっかくなのでこの際市長さんにお話をしたいことがありましたら、一つ二つくらいは話ができると思いますので。

【市長】

ライフガーデンとルネスの問題ですか？ライフガーデンは入りきづらいね。

【参加者（団長）】

ライフガーデンはいいけどルネスはどうなんですか。

【市長】

ルネスは今検討委員会でこの課長が担当でやっているんですが、徐々に色が出てきたよね。

【企画財政課長】

そうですね。今議会とか広報でご覧になっていると思いますが、ちょうど6月30日まで市民の皆さんの意見を聞くということでしたので6月の集計を今行って、市民の代表者の方からなる17名の検討委員会で検討をしてもらっています。それから議会の方でも特別委員会を作って検討をしていますので、秋口くらいまでにはあの建物と土地を買うか買わないか結論を出すということで。

【参加者（団長）】

駅前が暗いですよね。開いてなければ。われわれも出て行くときには暗いなという感覚

です。

【企画財政課長】

今までライトが付いていたものがなくなりましたので、そういう感覚になりますよね。われわれも早く結論は出さなければならぬんですが、一応議会の方の意見がございまして手続きは踏んでいるということです、いずれにしても秋口までには結論を出すということで進んでいます。

【市長】

ただ、最初はその建物はつぶして欲しいなと思ってはいたけれど、もったいないというのも分からないでもないし、ただあれが4つフロアがあってバックヤードまで入れると5千坪あるんだよね。今の葦崎の庁舎の倍以上あります。だから、利用するに全部埋めるといったら、維持管理費が莫大な費用になってしまう。そうはいつてもつぶして新しく図書館でも作るかといったら、そこまでお金を用意できるかどうか分からないし。いろいろな条件がいっぱいあって結果的には買う方向で、今の建物も残した格好で行く方向が有力なような感じはするけどね。ただ中の4フロアをどういうふう利用するかというのが一番問題です。

【参加者（団長）】

僕らが言うのは葦崎駅前が暗いということです。

【市長】

公共の施設になると、街灯はつけても中までつけているというのは難しいよね。

【企画財政課長】

真っ暗になることはないと思いますけどね。こちらの道路側につけて。とにかく市の玄関口ですからね。

【参加者（団長）】

玄関口ですからね。もう少し明るく見せていかなければと思いますよね。

【企画財政課長】

他にありますか。ではないようですので。

【市長】

ではお祭りに向かってがんばってください。今日はどうもありがとうございました。